

はじめに

東洋大学 国際哲学センター長
河本 英夫

情報は単独のシステムではない。それはエネルギーやエントロピーが単独のシステムではないことと同様であり、さまざまな活動態の「断面」に留まる。だが情報は、何かについての情報でもあり、別のものにかかわるある種の「志向性」をもつ。その意味では、意識や言語に近い性格をもち、世界大へとかかわっていく志向的な可能性をもつ。

この情報の特質について、今回も検討を加えてみることにした。多くの可能性を内在させており、どのように展開していけばよいのかも特定できないほどのテーマである。情報については、探りを入れながら検討してみるというプロセスがしばらくは続きそうである。

ことに身体にかかわる情報の扱いは入り組んでいる。身体はそれじたいで動き、みずからを感じ取って運動の調整を行うが、この動きに不要な情報は選択的に捨てていく本性を備えている。この場面では情報をどのようにして有効に活用するのかについては、多変数関数を解くようにして解がえられるようなものではないと思われる。

情報化社会については、社会精神病理的な分析も必要である。半匿名化されたネットワーク内で膨大な情報が飛び交えば、それまでに見られた精神病理とは異なる様相の病理が出現しそうである。このネットワークのなかでは、言動は一般に「演技性」を帯びる。誰も見向きもしない発信は、ただちに消えていくノイズだから、情報の内実は真偽よりも、他者から注目を浴びるかどうかにか点が移動する。「演技性人格障害」の温床になる可能性を秘めたまま、ネットワークは作動し続ける。そのとき個々の発受信を行うものにとって「現実性」は極端なかたちで変化してしまっている。

その一部がフェイクニュースである。ワシントン DC のハンバーグ屋が人肉を使ったハンバーグを売っているというフェイクニュースが飛び交い、襲撃事件が起き、死者まで出ている。言葉の一部に反応し、それを勝手に書き換え、さらに演技性を込めた身勝手な表現で発信を続ける。注意を受ければ、「思い違いでした」という演技じみた言い換えでまかり通ってしまう。こうした現実性の変容がどの程度の規模で、どの程度の深さをもって進行して行くのかを見定めることは、実は容易ではない。

実際の情報内容とそこで起きる社会的な動向には極端な乖離が起きる。小さな内容が、驚くほどの騒ぎとなる。断片的情報に敏感に反応して、ただちに動き出してしまうもの

がいる。これをかつての政治用語に倣って、「敏感感応性小児病」と呼んでおきたいと思う。

また特定の情感のモードに対して、言葉の抑制をかけようとする傾向も生まれる。言葉に抑制をかければ、神経症の傾向が生まれる。これを「ネット神経症」と呼んでおく。ネット神経症は、コミュニケーションのなかに密かで確実なバイアスをかけ続ける。言葉だけから事象を理解し、それで分かった気になり、それで現実性を掴んだ気になるもの(ネット神経症性妄想)、言葉に反応しその言葉に抑制を掛けるように促す者(ネット神経症性抑制)、言葉への感覚的、感情的な確信から騒ぎを起こし続けるもの(ネット神経症性ヒステリー)のようなさまざまな事態が起きてしまう。

ともかくも進行し続ける事態に対して、繰り返し注意を向け続けなければならない局面は続いていくと思われる。それとともに哲学の課題になるのは、新たに出現する局面に対して、どの程度の選択肢のある問題なのかを吟味し、より良い選択を提起し続けることでもある。